

別居

坂口良彬

「お父さん、お世話になりました」と言つて、出ていく女房へ、「さあ知らんな」と冷たく、しかし心では泣きながら返事をした。

息子が間に入つて仲裁し、離婚に近い別居となつた。原因は、私の家庭内暴力からきたものだった。

最後の砦であつた女房に去られて、私は動揺した。そして周りの親しい人に、言葉や手紙でその旨を伝えた。

幸い、息子が同居してくれたため、不自由は最小限で済んだが、心の中は暗闇だった。私の暴力行為はうつ病からきたもので、女房の顔をなぐり、骨折させて、警察沙汰になつても悔い改めない、私の哀れな末路だった。

この患難は寒い時には辛く、布団にもぐり込み、その暖のおかげで、辛うじて耐えていた。しかし、息子が就職のため上京する時、「おやじ、もう少し本音をはいて生きないとだめだよ。それに思いやりを持つてな」と言つてくれた。

息子が上京して一人になった時、女房の携帯電話の番号を教えられ、電話で話ができるようになった。

ある日、私の祈りに答え、まるでヨブのように、神と父親のまざった声が、

「良彬、もうつつばらなくていいんだよ。十分苦しんだ。あとは慈愛の神にすべてを任せればいいんだよ」

と私に臨んだ。

必死に耐えていた私の心は、氷がとけるように、少しずつ円満になっていった。

女房は介護ヘルパーの資格を取って、苦勞しながら耐えてくれ、東京と名古屋に分かれて教会生活をしているうちに、一年半たつて帰ってきた。

神は二人で生活する希望をくださった。

今でも時々行き違うが、再び同じあやまちを繰り返す事なく、私の中の暴力への衝動も神は取り去ってくださったのである。